様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：２５５０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６１６００９

研究課題名（和文）百寿者ケアに関する日韓融合研究：長寿文化と超高齢期のケア関係

研究課題名（英文）Japan-Korea Joint Research on Caring of Centenarians: Longevity Cultures and Relationships of Caretakers and the Elderly in Oldest-old

研究代表者
金　恵媛（KIM, Hyeweon）

山口県立大学・国際文化学部・教授

研究者番号：６０４０５５２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、超高齢期のケア関係及び長寿文化についての日韓比較考察と、健康長寿事例の可視化にある。研究は、日韓の百寿者及び予備軍（85歳以上）、その家族に対するインタビュー調査の実施と、健康長寿の身近なロールモデルとなる事例について、インターネットやパンフレット（多様な世代・立場の人々が接しやすい情報媒体）を通して発信する方法で行った。
研究結果として、高齢社会課題の解決においてはライフコース的視座及び文化的背景を尊重することが重要であることが確認できた。韓国、さらにはアジア地域に向けて日本の高齢社会経験知及び身近な健康長寿のロールモデル事例を紹介する意義も確認できた。

研究成果の概要（英文）：The purposes of this study are comparative examination of Japanese and Korean longevity cultures and relationships of caretakers and the oldest older persons, and visualizing cases of good health and longevity. The methodology of the study are interviewing Japanese and Korean centenarians and the elderly over 85 years old and their families, and introducing the healthy and longevity elderly and their life stories as role models on the Internet and brochures (which are various generations and people in various social status have access with).
The result indicates that for solving problems in elderly society, it is essential to have “life-courses” perspectives and to respect cultural backgrounds. The study also reconfirms the significance of introducing Japanese experience values of aging society and familiar lives of healthy-longevity elderly as ideal cases toward Korea and Asian countries.

研究分野：地域研究

キーワード：百寿者　高齢者　健康長寿　長寿認識　インタビュー調査　日韓比較　国際情報交換

１．研究開始当初の背景

個人の高齢期の長期化、社会における高齢期経験の普遍化によってアクティブ・エイジング実現に対するニーズ・期待は高まる一方である。ところが、高齢期の生活の質（QOL）を決定づける諸要因、健康長寿のための環境は必ずしも安泰ではない。そのため、様々な高齢者問題が深刻な社会問題へと拡大していき、結果的に、依存的、否定的、そして画一的な高齢者像・高齢社会像を強固なものにしていく傾向にある。

2011 年は韓国における「100 歳時代」元年とされる。主要国政課題の一つとして位置づけ、中央省庁・関連研究機関の横断的プロジェクトとして「100 歳時代」対応が始まったのである [1)]。日本を上回ると予想される高齢化速度やベビーブーマー（1955～63 年生まれ）の定年開始などを背景に、「準備された」高齢期環境の造成、ポジティブな高齢社会の実現を目指す取組みであった。年金制度の定着と長期療養保険制度の施行（2008 年 7 月）による自立した高齢期環境の土台が整備されていく一方で、高齢者の経済的困窮や社会的孤立などを背景とする高齢者の高い自殺率が注目された時期である。1970 年代以降の高度経済成長、通貨危機（1997.12）など急激な社会経済的変動が続くなか、長期の高齢期を想定した老後の準備ができないまま高齢期に突入した現在の高齢層が置かれた危機的な状況が深刻な社会問題として表れたとする危機的認識に基づく取組みであった。

日本では、総人口の 4 人に 1 人を高齢者が占め、百歳以上の高齢者も 2012 年に 5 万人を突破し、毎年 3～4 千人の増加規模を示す。マジョリティ年齢集団化していく高齢層に対して、高齢期にも自立的に生活し、さらに社会に貢献してほしいという期待が高まってきた。しかし、「孤独死」、「無援社会」という言葉が流行語（2010 年）となったことからわかるように [2)]、従来の血縁、地縁の形骸化は高齢期の自立基盤の脆弱化を招きやすい。一方、研究代表者が地域住民と共同して運営している研究会においては、高齢の参加者が生涯学習に能動的に参加している。自立的・自律的な健康長寿のロールモデル的な活動は多岐にわたって展開されており、高齢世代内の多様性、健康長寿の実現について重要な示唆を与えてくれる。

日本では 1970 年代から、韓国では 2000 年頃から百歳以上の高齢者に関する研究が進められてきた [3)]。百寿者研究から得られた知見から、百歳時代到来に備えて、健康長寿の秘訣を広く共有・実践する動きも見られるようになった。これは WHO が提唱するライフコース的視座や高齢者が所属する社会から受ける文化的な影響を包括的に捉える試みと重なる。

日本と韓国はともに 2050 年には世界最高の高齢化水準に達すると推計されている。人口の高齢化、都市化・家族機能の変化、産業構造の変化など、高齢期の生活の質を決定づける要因に大きな変化が表れている高齢社会韓国の今後を展望するにあたって、日本の先行経験知に対するニーズが高いことは言うまでもない。ところで、アジアの他の地域においても、日韓同様に急速な人口高齢化過程をたどることが予想されている。60 歳以上の高齢人口規模においてアジアは世界の高齢者数のおよそ 7 割を占めている。したがって、アジア地域における健康長寿の達成ニーズ・期待は、高齢者個人や当該地域社会に限るものではなく、その影響は計り知れないものがある。アジアの後発高齢地域に対する日本の国際貢献の観点からも日韓比較考察は有意義だと考える。

以上のことから、本研究では日韓の超高齢者及びその家族が形成する世代間の支援関係、高齢者の社会との接点、長寿に関する認識を捉えようとした。そして、身近なロールモデルを可視化していくことで、肯定的な長寿社会像、長寿文化の形成を図っていきたいと考える。

[1)] オ・ヨンヒほか、인생 100 세 시대 대응 국민인식 조사결과（人生 100 歳時代対応国民認識調査結果）、韓国保健社会研究院、2011

[2)] NHK「無援社会プロジェクト」取材班編著、無援社会―“無縁死”三万二千人の衝撃、文芸春秋、2010

[3)] 金恵媛・金英順・韓水正・吉田節子・李誠國、日韓百寿者に関する研究動向と課題、『山口県立大学学術情報』〔大学院論集〕第 6 号、2013、43-50

２．研究の目的

本研究の目的は、超高齢期のケア関係及び長寿文化についての日韓比較考察と、健康長寿の事例を可視化することにある。

WHO では、「人々が歳を重ねても生活の質が向上するように、健康、参加、安全の機会を最適化するプロセス」としてアクティブ・エイジングを定義し、その実現ために文化的、ライフコース的視座の重要性を指摘する [1)]。ライフコースからのアプローチでは、高齢期のあり方がそれまでの生き方、個人の歳の取り方に大きく制限されるもの、すなわち、「高齢者が均質な集団ではなく、年齢とともに個人の多様性が拡大していく傾向にある」という認識が前提となる。さらにライフコースは、その背景にある社会的文脈、すなわち、生き方としての「コース」選択及び選択結果に対する評価を決定付ける横断的要因である文化に規定されるところが大きい。言い換えると、WHO が指摘するように「高齢化は、友人関係、仕事上の付き合い、隣人や家族など、他者との関係の中で起きるもの」という認識から高齢期のあり方を捉えなければならないであろう。

高齢期の生活の質を決定付けるライフコースの特徴、文化的な差異に気づくためには、高齢者・高齢社会に関するステレオ・タイプを相対化することが必要である。多様な健康長寿事例に接することは、そのための有効な方法であると考える。研究者や高齢者だけでなく、多様な立場の社会構成員の手に届く、身近な情報媒体によって事例提供が行われる必要がある。そこで本研究では、ライフコースの多様性と文化的な影響が分かりやすい超高齢者のライフヒストリー、家族との支援関係に焦点を当てたインタビュー調査の実施と、調査から得られた健康長寿事例のうち、匿名性の守られる内容の一部をホームページ、パンフレットで紹介し、研究成果の社会的還元を図っていく。

[1] WHO 編著・日本生活協同組合連合会医療部会訳編、アクティブ・エイジング」の提唱 ： 政策的枠組みと高齢者にやさしい都市ガイド、萌文社、2007

３．研究の方法

研究は、文献考察とインタビュー調査の方法を用いて行った。インタビュー調査は、日韓の百寿者及び予備軍（85 歳以上）、その家族を対象に、2012～14 年度の 3 ヵ年にわたって実施した。基本的に非構造化インタビューであり、高齢者のライフヒストリー、長寿認識とケア関係について自由に語ってもらう形式で行った。本調査を実施する前に、百寿者インタビューを多数行った実績をもつ「にっち倶楽部」にインタビューを行った（http://www.nicheclub.jp/）。日本では福岡県、山口県、大阪府、兵庫県の 4 地域、韓国では慶尚北道、大田広域市、釜山広域市、忠清南道、大邱広域市、ソウル特別市の 6 地域において、雪だるま式でインタビューをお願いし、約 50 名の百寿者、超高齢者、家族から調査協力を得ることができた。なお、調査の実施に当たっては、山口県立大学の調査倫理委員会の承認を得るとともに、インタビューの依頼及び調査結果の公開に当たっては、被調査者の承諾を得ている。

もう一つの研究課題は健康長寿の事例を可視化していくものであった。より多様な年齢層・立場の人が気軽にアクセスできる情報媒体としてホームページ及びパンフレットを制作した。どちらの媒体も多言語化を試みるとともに、授業や地域での行事（学習会や公開講座など）で紹介しやすい内容構成と形式を心がけた。

４．研究成果

本研究の目的として設定した超高齢期のケア関係、長寿認識・文化についての日韓比較、健康長寿事例の可視化のそれぞれについての研究成果は以下の通りである。

日韓の差異が顕著に表れた点は、超高齢期生活における社会との接点・接触頻度、自律性であった。日本の超高齢者の場合、趣味活動での交流や多様な情報媒体との接点があり、家族以外の人との交流も一定レベル行われていた。一方の韓国の高齢者では社会との接点に乏しいケースが多かった。そのため、社会の変化や新しい価値観の受入れに消極的だったり、他の世代とのコミュニケーションに障壁を感じたり、また日々の生活を退屈に思い、結果的に長生きを否定的に捉える意見もみられた。

韓国の高齢女性の多くが非識字と教育経験を持たないことも情報習得や社会参加へバリアーとして働いていた。加えて、厳格な年齢秩序に基づく考えから、相対的に若い高齢者に遠慮して身近な交流施設である「敬老堂」に行けないケースも複数確認できた。これらの要因が複合的に影響し合い、韓国の高齢者の場合、自らが新しい情報、外部社会にアプローチすることは相対的な困難な環境にある。日本の高齢者では、印刷物やマスメディアの健康情報を活用・実践しているケースが多く、そのことが高齢期生活の自律性を高めることにもつながっていた。日韓のこのような差異は、WHO の指摘した、高齢期に至るまでの様々な経験が「その後の人生のすべてにおいて個人の学習能力や他人とうまく付き合う能力に影響」を与えるという状況そのものであり、現在の高齢層の生活の質を向上させる改善策、支援が求められる。

韓国において老人総合福祉館のプログラム利用、宗教活動、識字教室といった団体活動の比重が高いのに対し、日本では趣味活動（水泳や書道）や生涯学習、地域活動など活動が多岐にわたっていた。日韓ともに、社会活動への参加期間・頻度が両極化する様相を呈していた。家族や身近な人からの情報提供や手続きの手伝いなど、高齢期の社会参加は、サポート源の有無に大きく影響されていることがわかる。また、教会活動など定期的に社会参加を行っているケースでは、運動習慣を継続的に維持する場合が多く、高齢化の神話に対する認識にも差異がみられた。

一方、高齢期における家族の支援状況に注目すると、韓国の場合、長期療養保険制度を活用した形態が増えていた。家族がヘルパーの資格を取得するなど、特に子世代では制度利用に積極的な姿勢を示す場合が多かった。介護の担い手として家族の女性に負担が集中する状況は依然根強いものの、息子が担い手となる老老介護や介護サービスを多く取り入れたケースなど、ケア関係の多様化が図られていた。

長寿認識についてみると、「健康であれば」を長生きの前提条件とする点では日韓、高齢者、そして高齢者の家族に共通の見解としてみられた。その一方で、健康ではない状況でも、出来る限り長生きをしたいという意見も複数あった。また、日々の生活を退屈に思い、その無為感から長生きを否定するような意見が韓国の高齢者で複数語られており、個人

的にはもちろんであるが、社会的にも生きがいを見出せる環境づくりが必要な状況と考える。

つぎに健康長寿事例の紹介については、以下の図１、図２の形で進めている。事例紹介を行うホームページには、研究代表者の教育活動や地域活動のコーナーなども併設した。健康長寿事例への接触頻度を高め、ポジティブな高齢者像を形成する契機を増やす狙いがある。ホームページは開設ができた段階である。今後、継続的に事例紹介を続けていくなかで閲覧者との双方向の交流を通してより分かりやすい、伝わるホームページにしていく予定である。パンフレットは、日韓版と英日版に作成し、授業や地域の公開講座、学会などで紹介している。

図１HP 作成：http://www.hwkimlab.com/

図２：パンフレット（日韓版・日英版）

研究結果として、高齢社会課題の解決においてはライフコース的視座及び文化的背景を尊重することが重要であることが確認できた。長寿者の自律性、家族の長寿認識や支援関係、健康長寿のための個別実践例を広く紹介することで、身近なロールモデルによる肯定的な長寿文化の形成が期待できる。

次に、韓国、さらにはアジア地域に向けて日本の高齢社会経験知及び身近な健康長寿のロールモデルとなる事例を紹介する意義を確認することができた。韓国では急激な人口の高齢化・親子関係の変動とともに支援体制に混乱がみられ、さらには長生きを否定的に捉えるような考えや行動も一部観察されている。同様の高齢化傾向がアジアの他の地域でも予想されるなか、類似した社会文化背景を持つ日本先行経験知の活用、とりわけ長寿者の自律性や長寿認識、健康行動などは具体的、実践的な情報として有効であろう。

以上の成果は、アジアの他の地域へと研究連携を広げていく土台として活用できるものであり、これを発展させた研究を 2015 年度から展開している（「アジア連携型長寿社会基盤構築に関する実証的研究：ICT を活用した広域多主体協働」）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 金恵媛、「百歳時代」ロードマップ―「無縁社会」における超高齢者の「縁活」―、日本文化学報、査読有、第 60 輯、2014、263-288（ISSN 1226-3605）

② Kim Hyeweon、Lee Sungkook、Kim Youngsoon、Views on longevity and social connections of Korean Centenarians、Bulletin of the Graduate Schools、査読無、No.7、2014、51-60 http://ci.nii.ac.jp/nrid/9000243729490

③ 金恵媛、百寿者の語りにみる健康長寿習慣―「百歳の肖像」を手がかりに―、日本文化学報、査読有、第 57 輯、2013、151-168（ISSN 1226-3605）

④ 金恵媛・金英順・韓水正・吉田節子・李誠國、日韓百寿者に関する研究動向と課題、山口県立大学学術情報〔大学院論集〕、査読無、第６号、2013、43-50 http://ci.nii.ac.jp/naid/110009557059

〔学会発表〕（計７件）

① KIM, Hyeweon、Effective Method to Disseminate The Paradigm Conversion of Image of Elderly、IAGG Asia/Oceania 2015 Congress、2015.10.19-22、Chiang Mai(Thailand)（採択済み）

② Han, DongHee, KIM, HyeWeon、Benson Kamary、Address Activing Aging Message from Oldest Old in Korea、IAGG Asia/Oceania 2015 Congress、2015.10.19-22、Chiang Mai(Thailand)（採択済み）

③ 金恵媛、韓日百歳人比較：インタビュー調査分析、韓国日本近代学会、2014.11.1 鹿児島国際大学（鹿児島県・鹿児島市）

④ 李誠國、李希京、尹喜貞、李應喆、田中マキ子、金恵媛、弘津公子、韓国と日本の百歳高齢者のライフスタイル、日本老年社会科学会、2014.6.7、下呂交流会館アクティブ（岐阜県・下呂市）

⑤ KIM, Hyeweon、An examination of centenarians' hobby and social participation: a study of interview articles ＜Portrait of Centenarians

＞、8th Active Ageing Conference in Asia Pacific 、 2013.6.27 、 Busan (S.Korea)

⑥ KIM, Hyeweon 、 The daily lives of centenarians: through an analysis of interviews (ss25 416-r：Active Aging - A Perspective Of Korea-Japan Centenarian Studies)、The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics、2013.6.25、Seoul (S.Korea)

⑦ 金恵媛、100 歳の日常：「にっち倶楽部」にみる日本の百寿者、韓国日本文化学会、2012.10.27、Daejeon (S.Korea)

〔その他〕

① ホームページ：
http://www.hwkimlab.com/

② 金恵媛、ホップ-ステップ 100 歳時代(パンフレット、日韓版)、2015.3
http://www.hwkimlab.com/ホップ-ステップ 100 歳時代/

③ 金恵媛、Hops Step for The Homo hundred Era(パンフレット、英日版)、2015.3
http://www.hwkimlab.com/ホップ-ステップ 100 歳時代/hop-step-for-the-homo-hundred-era/

６．研究組織

(1)研究代表者

金　恵媛 (KIM, Hyeweon)
山口県立大学・国際文化学部・教授
研究者番号：60405529

(2) 研究協力者

李　誠國 (LEE, Sungkook)
金　英順 (KIM, Youngsoon)
韓　水正 (HAN, Sujeong)
ハン・ドンヒ (HAN, Donghee)